

艦砲がはじまった頃、疎開命令が出て、私はお米を頭にのせて、子供をおんぶして、山原(國頭ともい、沖繩本島北部の総称)に向かつて逃げました。ところが途中、読谷で四、五日してから、急に四男(七歳)がどこへ行ったのか見失ってしまったんですよ。よその人の後について逃げて行ったらしく、その子は何か月も私の手許からいなくなっただんですけれど、そのとき私は、家に帰ったのかもしれないと思って、五男(四歳)をおんぶしたままで、みんなと別れてまた家に帰ってみました。家にはおじいさん一人が残っていました。おじいさん、セイキチはこなかったですか、どこにもいないが、こなかったよ、と言っていました。それじゃ、さ、もう大変だから、一緒に行きましょう、とおじいさんを誘ったんですけれど、わしはこれだけの家畜を捨ててはいけないから、家に残る、って頑張っていました。ですけれど、後で、おじいさんは山原に逃げて行ったそうです。

読谷から子供を探して帰ってくる時には、もう敵は上陸しているよ、比謝橋あたりに、敵がいるよ、と通る人に教えられ、実際に米軍がいるらしく歩けなくなっていましたから、私は遠道して屋良を廻って帰ってきたんですよ。それから、家に寄って、一人で逃げるつもりでしたけれど、弾が激しくてどこへも行けないもんだから、砂辺のクシミイの墓に隠れていました。その近くでは、まだ友軍とアメリカが激しく撃ち合っていました。私の家の裏の家に、泊っていた兵隊さんたち四人と出会いました。覗いて、小母さんこ

がいたんです。その青年が、ぼくがキビもイモも取ってきてあげるからと大声を出してですね、取っても来きれなくせに。私は不安になってですね。あんたはそんな恰好をしていたら、今に兵隊にとられるから、用心して、ボロの着物を着た方がいいよ、と私はおどして着物を着せてやりましたよ。その墓の中には、助腹にかかって死んでいる娘の死体もそのままになっていました。

そうしているうちに、三日経ったら、昼にアメリカがきました。墓の入口は、畳二枚と松の丸太で押しつけて塞いであったんですけれど、すぐにそれらはどけられてしまつて、二世がデテコイデテコイと言つて、アメリカは墓に懐中電灯を向けていました。そして、墓の主のおじいさんが一番に引きずり出されたもんですから、じっとしていると弾を撃ち込まれると思い、私たちも恐る恐る出たんです。出てから、叔母さんは、どこにも行くなよ、死ぬときは一緒だから、と言って帯で私とつながりませんでした。隣の墓には、男の人たちが入っていました。その男の人たちが鎌や鍬など持って、アメリカを殺すといつて騒いだんですよ。アメリカは墓をとりまいて、墓の中に爆弾を投げ込んでいました。パンと、爆発する音が出て、墓の中に入っていた三十名余りの人たちは、みんな焼け死んで、ただ一人七歳になる男の子だけが助かっていました。

私たちは、すぐアメリカに引張られて、海岸まで行きました。そこではクロンボー(黒人)が私たちをひとりずつ抱きあげて、海上トラックに乗せました。そこは(現在の)嘉手納村の野国の海岸(のくに)でした。私たちは海に捨てられるかもしれないと思って、みんな手を握り合つてですね。そうしたら、着いたところは、砂辺になつて

んなところにいるんですか、学校に行く道はどこですか、と訊かれて、私は、学校はあっちからですよ、と教えてやりました。

私たちは墓の中に四人いました。ここにいると危ないということになったんですけれど、その人たちは私が持ちだもんだから、一緒に歩きたがらなくてですね。その人たちは、日が暮れないうちに帰ってしまった、私は一人になって残っていました。私はいったん子供(五男)をおろして、乳を飲ましながら、泣くなよ、泣いたら大変よ、弾がとんでくるよ、と言いきかしてですね。ところが非常に艦砲射撃が激しくなつたので、仕方なく、這つて逃げました。

そして、むこうにいるのは、友軍の兵隊さんかなあ、道をなおしているのかなあと思って、行つてみたら、アメリカになつていたのですよ。私は驚いて、キビ畑の中に入って、それから遠廻りして川づたいに、オクマガイという所に行きました。クンノウグスク(國直城)のオクマガイの松林の中に入ってみたら、友軍の兵隊さんたちが何十人も死んでいましたよ。それでも私は、その中を歩いていたら、村のおばあさんが、これから先はどんなにしても通れませんが、一緒に戻りましょう、とおっしゃるもんだから、私は諦めて、また川づたいに歩いて、ソナーグワールイの叔母さんの墓を探して、その中に入りました。中から砂辺のカマーのね、どうしてここにきたの、敵は上陸しているよ、とおっしゃるから、私は、だからあっちの方まで逃げて行つたけれど、セイキチがいなくなつたから探しながらここに来たんですよ、そうなの、じゃあこっちに入つていなさい、ということになつたんです。

そこには、フィリピンから以前帰ってきた少し頭のおかしい青年がいるんですよ。砂辺の捕虜収容所だったんです。海岸の原っぱで、私たちが最初で、誰もいませんでしたよ。自分の部落だったので、少しは安心もしましたけれど、まわりは簡単に金網が張りめぐらされてありましたよ。私たちは十一名ばかりでした。それから四日間、放つたらかされて、何も食べませんでした。ときどき、アメリカが鉄砲を持って現われるので、こわくてですね。それに、何もあたえられないので、ただもうひもじい思いをしてですね。昼は、カンカン照りだったり、雨が降ったり、夜は夜露にうたれて、ただ砂地の上に放つたらかしてました。

私の子供は熱を出してですね。どうしようもないので、ただ心配しているときに、二世がきて、中城村出身と言っていましたけれど、どうしたんですか小母さん、と心配してくれてですね。今から思えばアスピリンだったんですね、薬と水を持ってきてくれました。子供にはこれを飲まさないよ、と言つてまた、シーツを被せてくれたりしてですね。その二世がですね、今のところどこが負けるのか、まだ判りやしませんよ、私の兄弟も沖繩にいるし、自分は兄弟を殺しに沖繩にやってきましたよ、と話していました。私は、その薬は毒じやないかと思って、また周りの人たちも毒だろうといっていましたので、私は自分で少し飲んでみてから、どうもないことが判つて、それから子供にも飲ましたんです。それで、熱も下がっていました。

それから四、五日したら、助役さんたちも捕虜になってきて、そこは急に人がふえはじめてですね。自然に共同生活になって、炊事班を作つてですね。みんな部落の焼け残りの家から鍋やお米など取

ってきたりしてですね。何もかも配給制にして、みんなにおにぎりの配給がありました。

それから一週間ぐらいいしてから、命令が出て、アメリカに引張られて、みんな歩いてですよ、(現在の)北中城村の島袋^{しまぶく}まで行ったんです。おにぎり一つずつ持たされて、歩きながら食べなさいということだったんでしようね。私は焼け残った自分の家から蒲団を持ってきてありましたから、その蒲団は二十名ぐらいで使っていたんですけれど、それを頭の上で荷物も持って、子供をおんぶして、ぶらぶら歩いて行ったんです。

島袋では、とても苦労しました。島袋の部落は無傷で残っていましたが、けれど、沢山の避難民が集められたので、食糧不足だったんです。それから、アメリカが乱暴するので、こわくてですね。年寄りでも男の人がいるところは、いくらかよったんでしようが、私は親子二人だけです。長男(十九歳)は兵隊にとられていまして、あとの次男、三男、四男はばらばらになって逃げていなくなっているし、私はおんぶしていた五男(四歳)と二人きりでした。

私は子供をおんぶして毎日イモ掘りに出かけました。一軒の家に何十人も詰込まれて、窮屈でしたけれど、外出は割合に自由でした。ただ若い娘は、道を歩いていても、アメリカから無理矢理に引張られてつれて行かれていきました。ほんとうにこわかったんです。一緒にイモ掘り作業に行っても、若く見える女は、すぐ引っぱられていきました。助けてーしても、男の人も誰も助けることができませんでした。もし男の人が助けようとする、アメリカは銃を

あっちこっちでそれに似たような事件はたびたびあって、若い娘が外に出ると、すぐつれて行かれました。つれて行かれた後、どうなったか、ほとんど判りません。どうなったことか。帰ってこない娘もいます。その頃はもう、桃がなっていましたけれど、桃を取るために木に登っていると、アメリカは下でおりにくるのを待っているくらいでした。だから娘たちは、屋根裏に隠れていました。あとからは年寄りだけが出歩くようになっていきました。私はいつも子供をおんぶして、狙われないよう気をつけていました。

一か月二か月と経つと、言葉の少し通じる沖繩の中年男が、アメリカから物資やら金を貰って、墓の中などで、女の人たちを説得させてアメリカに替わるがわるやらせて、儲けているようでした。それでも、夜など寝ているところへ、女はいないかと、尋ねてきていました。また、シード(北谷村の字勢頭)の人の二十歳になる娘が、昼間、もとの壕に親と一緒に荷物を取りに行った帰り、親の見ている前で、クロンボーに引張られて行ったそうです。その娘はそれっきり帰ってきませんので、多分死んだんだろうとみんな噂していました。

島袋には三か月以上もいて、毎日食糧探しをして、共同生活をしていました。食べることはなんとかできたのに、アメリカのやることはどうにもできませんでした。いちどは、警察の前に、強姦されて死んでいる若い娘が臥かされているのを、私は見ました。その傍には、母親らしい人が泣きくずれていました。私が見たのはほんの一例にすぎません。強姦事件は数えきれないほどあったんです。白人よりも黒人の方が多かったようです。

持っていて、撃つんですから、どうにもなりません。ほんとは撃ち殺すんですよ。

捕虜になった中から、CPといつて巡査になっている人たちがいましたけれど、その人たちもなんの役にも立たず、アメリカのいうようになって、何もいうことができませんでした。巡査は、クロンボー服をつけて、CPと書かれた腕章をしていたんですが、まだ警棒も何も持っていないませんでした。

泡瀬^{あわせ}(美里村)の人で、前に料亭をしていたそうだけれど、その人の家族は二階家に棲んでいました。そのお父さんは、若い娘を三、四人つれていました。実の娘だったかどうかよく判りません。もとの料亭の女の人たちだったかもしれないね。お父さんは、言葉はよく通じないのに、アメリカになんでもオーケイオーケイして、アメリカから煙草やら石鹼やら毛布やら貰っていました。

ある日また、私の子供が熱を出して、一区のアメリカ病院に私が子供をつれて行ったときでしたけれど、二階家にさしかかったらちようど四、五人のアメリカが煙草を一箱持つてきて、そのお父さんに渡していました。そのあとで、アメリカたちは、みんなの見える前で、そのお父さんの娘を、家の中でつきつきとおこなった(強姦した)んです。みんな騒いだんですけれど、アッサヨー(感嘆詞)こわくて、私はよくは見いきれませんでしたけれど、鉄砲を向けて、替わるがわるおこなっているようでした。それからまた、それだけではすまさないで次には、山羊小屋でも、おこなっていました。山羊小屋に引きずり込まれたのは、二十四、五の肥えた女のようにでした。

男の人たちや、男のいる家族は、島袋から福山^{ふくやま}(旧金武村、現在宜野座村)に行つて、自分たちで家を作ったそうだけれど、私たちのような男手のない家族や女の人たちは、宜野座(旧金武村)にトラックで移されました。その捕虜収容所は、テント小屋でした。

宜野座では、島袋よりもっと食糧難でした。一か月も経たぬうちにみんな飢え死にしそうになっていました。その土地の人たちは、避難民だといって睡蔑して、同じ沖繩人同士なのに、どんなに冷たい仕打ちをしたことか。イモの葉っぱです、ね、カンダバー一つもくれようとしませんでしたよ。私は島袋から味噌やお米を少し持つてきていましたから、最初のうちはそれで凌げたんです。あとからは食べるものがなくて、大変でした。カンダバー(サツマイモの葉)やお米や豆類が、ほんの少しづつ配給があったんですけれど、それだけではとても足りなくて、いつもひどい思いをしていました。おばあさんたちや子供たちから、栄養失調でつきつきと死んで行きました。それでも土地の人たちは、カンダバーが畑に沢山あるのに、私たちにはゆずってくれませんでしたよ。

軽蔑的な言葉で、「オーバー(金鯛)避難民カイ、カンダバー、食ッサー」と、カンダバーをやるときでも家畜同様に使われていました。那覇の人でしたが、夜、カンダバーを取りに行つてですね、腕が垂れ下がるほど棒で腕を叩き折られて帰つてきました。血だらけになって、重傷でした。怪我をさせた土地の小父さんは、私たちがアメリカと一緒にいることを怒っていたのかもしれない。戦争はまだ南部でつづいている頃ですから、でも、それだ

けが理由ではなくて、そこは寒村なので、自分たちの食糧がへるのを恐れていたのでしょう。

「ギノザ(宜野座)ノサク、ンジャリムン、ノー、ウランタンド」

ほとんどが悪人のようになっていましたけれど、宜野座にもいい人はいました。その人はハワイ帰りでしたよ。その家の奥さんは元学校の先生で、校長先生の嫁になっていました。私はその家に三か月使って貰って、助かりました。その家の人が、私たちに使われないか小母さんといわれ、私は有難く思い、いくらでもいいですからお願いします、ということになって、使われて、どうやら食糧にもありついたのでした。その家の長男も嫁も配給所に通っていましたが、食糧を持ってきて少しづつくれたりしていました。そうしているうちに、私は自分の子供たち(次男三男四男)が、古知屋にいらるということを聞いて、逢いに行きましたよ。子供たちはおじさんと一緒に、民間の家で暮らしていました。おじさんは最初は一人で残っていたんですけど、後で馬をつれて山原に向かっているうちに山の中で馬を盗まれてしまい、諦めて、それから孫たちを探して歩いて、一緒になったそうです。子供たちはとても瘦せていました。やっと親子みんな一緒になれたので、私も元気を出して、宜野座からあっちこっち遠くまで行って、食糧の商いをして暮らすようになりました。

註、区長照屋稔氏 補足

当時の強姦事件は、コザ(旧越来村) 一带から喜友名(旧宜野灣

ぐ撃ってくる、仕方がないからこっちは隠れてまた威嚇してですね、あれらが逃げるのを待つんです。が、ときには逃げない奴らがいるんですよ。そういうときは、あまり撃ち合ったら危険だから、私たちは一応逃げて、MPを呼んでくるんですよ。そのくり返しでした。そうしたことは、ずっと遅くまでつづいていましたからね。

あとで、喜友名の農業班の人たちは、私たちに、あなたたちのお蔭でイモ掘りもできたんだからと、カボチャとかへチマとか野菜類を食べて下さいと持ってきていました。私たちは憲兵隊所属で、食糧も沢山あって不自由していませんでしたから、いりませんと返しましたけどね。また、私たちは、夜になると、やはりキヤービン銃と拳銃を持って、MPとジープに乗ってですね、中城、西原、(現在の)コザ、読谷、牧港(旧浦添村)まで廻っていましたよ。そしてたびたび収容所や住民の家の近くで、強姦しにくるアメリカを見つけて、よく撃ち合ったり追い出したりしたんですよ。

喜屋武 スミ(三十九歳) 家事

私たちはクマヤのガマ(洞窟)という自然壕に、みんなと一緒に入っていました。もう艦砲がはじまっています。それで危険になってきて、そこでどうしようかと、村中の人たちが相談して、その夜九時頃にみんな村から出て避難するようにと決まったんです。私たちは嘉手納の汽車の道、その道をたどって北に向かい、それからずっと山原に向かって歩いて、名護に行きました。

村)にかけて、そうとうあったのではないのでしょうか。私はSMPをやりましたから、およそ判っています。昭和二十一年(一九四六)二月に、戦争が終って七か月後です。その頃も食糧難で、軍物資の配給ではとても足りなかったもので、毎日のように大山(同村)の近くの喜友名にイモ掘り作業に(大多數の女たちと少数の男たちがですね)行くとき、私たちSMPは監視について行っただけです。そんなとき、アーシャヨ(感嘆詞)、アメリカはですね、GMCで三四名がいきなり乗りこんできて、若い女をその場ですぐ引張って行くんですから。それを私たちは防ぐ役目です。

作業しているのは、たいがい女が何十名に男が四、五名、男といってもお年寄連中です。私たちが行く一寸前までは、毎日すぐ眼の前でどんどん強姦されて、もう大変だから、なんとかしてくれという住民の強い要望がありましたからですね、私たちももう大変だからなんとか防がせて貰いたい、というふうなことを憲兵隊の本部に私たちが話してですね、それから監視に行くようになっていたんです。

C Pは警棒しか持たないので役に立たないんですよ。だから私たちは、地理に詳しいものから四名一組編成ですね、キヤービン銃と拳銃を持ってですよ。キヤービン銃のために、弾がなくなったら殺されるからというわけで、弾倉を四個づつ持っていますね、三日交替で毎日監視しに行っただけです。私たちが行ってからも、何回も女を引張りにくるアメリカとぶつかりましたよ。私たちは威嚇して、銃を撃つんですよ。イモ掘り作業も危険ですが、こっちは命懸けです。威嚇した場合は、アメリカも撃ってくるんですよ。す

砂辺を発つときに、夕方、アメリカの船が燃えているのを見ました。誰かが日本の水上特攻隊がやったのだろうと話していました。その一時間前に、北谷のハンビ飛行場(現在)の手前のジャーガルにまがる橋のところで、兵隊さんがバンザイ、バンザイして、特攻隊が出て行くのを見送っているのを、私たちは見ていたんですよ。

その日は、朝からの艦砲がやんで後、喜屋武さん(この男の方は後で亡くなられたそうです)という村の指導者が壕に来て、みんな出て見なさい、日本の連合艦隊が沢山きているよ、いくさは勝っているんだよ、と言ってですね、私たちは壕から出て海を眺めました。

そうしたら間もなく、とつぜん軍艦から攻撃があったんですよ。私たちがあわててすぐ壕に戻って、もうぜんぜん壕から出られなかったんです。それから夕方になって艦砲がやんで、特攻隊が出て行って、あとでみんな避難のために出発ということになったとき、敵の軍艦が燃えているのを見ました。

砂辺を発つてから、恩納で夜が明けたんですけど、私たちがアダンの下に隠れて、少し眠りました。私は長女(十二歳)と次女(五歳)と三女(二歳)をつれていました。長男(十五歳)は農兵隊に出ていました。それから私たちは、恩納から歩いて、名護に出て、さらに北に向かかって歩いて、羽地(村)の川上から仲尾次に行つて、その避難小屋にいたんですよ。

そこにも艦砲がとんできたので、そこから山の中に入って、多野岳のあっちこちに逃げ隠れていました。もう食糧は何も持っていませんでした。多野岳には、日本の海軍がいたんですよ。海軍の小屋

から少し離れた山の下の方岩穴に、沢山の米俵が積まれています。それは友軍の米でした。朝の七時頃から番兵が立っていました。だから私たちは、ちょうど朝の七時頃までに、山の急坂をおりて行って、その米を少しずつ盗んできたんですよ。

それから多野岳にも弾がとんできたので、私たちは逃げて、山を越えて東側の、久志村（現在名護市）の三原というところに行きました。三原というところは何もなくて、川端に、自分たちで茅を集めて小屋をつくって、食糧は山のあちこちの畑からイモを掘って食べていました。天仁屋（同村）までも行きました。

多野岳から三原にくるときは、砂辺の部落の人たちも何人か一緒にしました。みんな友軍の米を取ってきて持っていましたから、三原では、その米を節約して食べていました。ところが、山の中から出てきた敗残兵のような日本兵が、米を持ってきている避難民からつきつきと取り返して、また山の中に行ってしまうました。

私は多野岳から三原にくるとき、子供たちをつれてのことだし、米は持てそうもなかったので、山の中の叢に隠してあったんですよ。それをあとで取りに行ったら、部落の娘さんをつれて多野岳にまた行ってみたんですよ。そして、三原の山の中でも防衛隊や日本兵の二、三人の死体を見ましたけれど、海軍の野戦病院の小屋まで行ったら、小屋の扉の下に、何人も死体がころがっていましたよ。生きている兵隊が三人いました。一人の兵隊は、両手がなくなっていて、空罐のころがっている前に坐っていたんですよ。もう動けないようでした。その人が、おばさん、と叫んだんだから、私は驚いて、はいと返辞したら、水を汲んで飲ましてくれなかい、と言

ったら、そう言い伝えて下さいね、と言ってその人とも別れたんですよ。それから、米を持って三原へ帰るとき、道をまちがえて、馬の死んでいる所に出たんですよ。そこから引返して歩いているとき、部落のウマニーぐわ（屋号）のおじいとお会いしました。おじいさんは荷物を背負っていました。ゆっくりゆっくりおりに来るところでしたけれど、急に荷物と一緒にどんどん転って行っちゃったんですよ。それでも私は助けることができないんだから、そのまま三原に行っちゃったんですよ。三原の山の中で、またも日本兵の死体とお会いしました。そして三原に行ったら、山の中で転ったおじいさんは大した怪我もせずに戻ってきましたけれど、そのおじいさんは間もなく栄養失調で亡くなられました。また、あとで誰かが多野岳に米を取りに行ったら、もう米もなくなっていて、海軍の小屋も焼き払われていたそうです。

三原ではお年寄がほとんど栄養失調でつきつきと亡くなってしまいました。三原にはもう食糧になるものが何もなくなっていて、みんなと一緒に私たちは大川（旧久志村）に移りました。大川では、名護の方まで山からおりて行って、イモ掘りに出かけました。甘藷はいくらでも取れたので、食糧には当分困らずにいたんですよ。ところが、あとからは、捕虜をつかまえてアメリカカーが廻っていましたから、私たちはもう名護の方にも行けなくなりまして。そしてとうとう、大川にもカチミヤ（捕虜をつかまえる人）がきていました。

その頃、名護には、アメリカカーが多かったもんですから、私は子供たちをやらして、アメリカカーから煙草ぐわを貰ってくらしたんですよ。

うんですよ。そして、足を怪我している兵隊と、どこか怪我してやぱり動けないで寝転んでいる兵隊とが、自分たちにも水を飲ましてくれ、と頼むんですよ。三人眼だけバチバチして虫の息で生き残っていたんですよ。弾はときどきとんでくるし、私はどうしたものかと迷いましたよ。水を汲んでやらないと、その調で弾があたりやしないかしら、また水を汲んでいるうちに弾にあたりやしないかしら、と私は心配しながらも、岩の間からぼたりぼたり落ちる水を空缶にためて、それを三人の兵隊に口まで持って行って飲ましてやっただけです。

三人から感謝されましたけれど、寝転んで起ききれない若い兵隊は、ありがたう小母さんとくり返し言っていました。その言葉遣いから、私は沖繩出身と判って、にいさんは沖繩人でしょう、はい沖繩人ですよ、それじやどこな、泡瀬のカンジエクグワ、金細工（小）というところのものです、そう、それじやゆっくりゆっくりでも這って歩いたら、一緒につれて行くけど、と私は言ったんですよ。どうも動けませんよ小母さん、ねえだから小母さん、もし泡瀬の人に逢ったら、泡瀬のカンジエクグワの息子が多野岳で倒れているから、つれに来れるんだ、たらつれに来てくれって伝えてくれませんか、というもんだから、私は、じやそうするよ、と言って別れたんですよ。

それから三原の山の中で、偶然にも泡瀬の男の人に逢ったんですよ。それで私は、さっきの怪我した兵隊のことを話したんですよ。そして、ああそれは親兄弟以上にはどうにもなりませんね小母さん、と言っていました。それじやカンジエクグワの親兄弟にも逢

す。その煙草ぐわを持って、私は安部、嘉陽、天仁屋まで行って、イモや食糧と替えてきたりしていました。MPが通らないうちに、明け方に行くと、ときにはヒジャー（山羊）の肉も取り替えてきました。天仁屋の学校には、那覇の人たちがいました。那覇の人たちは、反物も持っていましたけれど、食糧難で飢えているのですから、私は食糧としか交換しませんでした。

捕虜になるときは、男の人たちはみんな大川の山の中に逃げてしまつて、女子供だけが残っていました。私は小さい子供はおんぶして大きい子供たちは手をつないで、捕虜にはなるまいと思つて、逃げるつもりでした。そしてカチミヤがきたときには、小屋の裏からそのへんをおるおる逃げ廻っていましたけれど、アメリカカーに追い廻され、囲まれてしまつて、とうとうつかまつってしまったんですよ。

それから捕虜はぞろぞろ歩いて、古知屋・湯原（旧金武村）の方へつれて行かれました。歩いているとき、アメリカカーもついていました。私はバーク（さる）に米五合ばかりと、ウサ叔母さんから預っていた油鍋を入れて、頭にのせて歩いていました。そのバークの中の鍋を、どういふわけかアメリカカーは取つて道に捨てるんですよ。鍋は預りもんだから、なくしたら大変だと思ひ、アッサミヨ（感嘆詞）、私は拾つて、またバークの中に入れてたんですよ。すると、また取つて捨てるので、また私が拾いに行こうとすると、アメリカカーは捨ててはみたものの、自分で拾つてくれて、仕方なさそうに私のバークの中に入れてくれました。

古知屋には、日本兵が山から出てきて、避難民から食糧を貰いに

来て、まる一日イモ掘り作業に出てから、また山の中へ逃げて行きました。髪もぼうぼうして武器も持たず、見るからに気の毒な姿でした。

私たちは戦争が終って後もずっと古知屋で開墾作業をしながら暮らしていました。

國場信子(二十歳) 農業

私の主人は、兵役で南方に行っていましたので、私は二歳になる長女をかかえて、一人で農業をしていました。

三月二十三日でしたか、クマヤーのガマにいるとき、艦砲が鳴り止んだあと、村の喜屋武さんが、みんな出てきてみなさい、日本の連合艦隊がきているよ、と言う声が聞こえたので、出て見たら、ずっと那覇の方の海から慶良間諸島近くまで、真黒く、軍艦や輸送船がつんでいたました。そしてみんな喜んでですね。もしたら、間もなく、むこうから弾がとんできてですね。は、これはもう大変だ、日本軍じゃない、アメリカだと判って、またみんな壕に戻ったんです。それからもう艦砲が激しくなってますね。飛行機の爆音も聞こえて、爆風がどンドン壕の中にも入ってくるんですよ。それでみんな生きたこちもしないで、おびえて、日本軍も私たちの壕に入ってきてですね、國頭(沖縄本島北部の総称)の方へ避難するようになると言っていました。区長さんも、羽地の仲尾次に避難するようになると言われたんです。

その壕は、クマヤーと呼ばれていて、部落民全部が入れるようなだから、空家の小屋にイモが沢山積まれてあるのを見つけて、どうせ売らないから取って行こうじゃないかと決めて、みんなで南京袋にイモを詰めていたんです。もし主が来たら、お金を払おうね、と話しながら、イモを取っているとき、ちよろどその部落の区長らしい人が回ってきたんです。あんたたちはイモを盗んでいるのか、と言われてですね。いいえ、お金を払うつもりですから、売って下さい、とお願ひしたら、それは売るもんじゃないから、こぼしなさい、その代り、山の方には沢山米があるから、米を買って行きなさい、と言われたんです。私たちは喜んでその人について行ったんです。もしたら、山の方には部落の人たちが集っていて、米を売るところか、みんなガヤガヤ私たちを罵って、泥棒あつかいして、私たちは非常に軽蔑されたんです。米があるというのは嘘だったんですよ。みんなから顔をじろじろ見られてから追い返されたんですけど、私たちは帰っても食べるものが何もありませんでしたので、思い切って、さっきの空家の中に積まれてあるイモをそれこそ盗んで持って帰りました。

それから幾日かして、三原には何も食べれるものがありませんでしたから、私たちは自分のシマ(自分の出身地のことを方言でシマまたは村という)に帰った方がいいと思って、その方向へ歩きはじめたんです。そうしたら、大浦(旧久志村)にきて、そこには米軍がちゃんとテントを張っているんですよ。私はあとき二十歳でしたから、若い女はさらわれるという話を聞いていましたから、急いで薬罐や鍋の底についている黒墨を顔に塗りたくって、着物も裏返しに着てから、そこを歩いたんです。米軍は道端で休んでいました

大きな自然壕です。そこに沢山の人たちが一緒に私たちも入っていませんけど、その晩、そこから出ました。

クマヤーから出たものは五、六百名でしたけれど、那覇の方からも避難民が歩いてきていましたから、砂辺の前の県道は、ぞろぞろ人が行列しているようでした。私たちは、晩の八時頃、壕から出ました。そのとき私は敵の軍艦が燃えているのを見ました。

私は子供をおんぶして、荷物も持って、頭にも荷物をのせて、歩いて行っただけです。夜が明ける頃には、恩納についていました。昼間は敵の攻撃が激しかったので、私たちは海岸端のアダンの茂みの中に隠れていました。夜になってから、みんなぞろぞろと歩きはじめました。翌日は安富祖(恩納村)につきまされたけど、その部落はほとんど焼かれていました。その日は、私たちは生芋を食べてすごしました。日が暮れてからまた歩きはじめて、翌日の夜九時頃、仲尾次についていました。その夜は、日本軍の掘った壕に一泊して、翌日山の中の避難小屋に移ったんです。

それから一週間ぐらいしたら、米軍がきたんです。米軍は、そこから一たいを焼き払っていました。私たちは山を越えて三原に逃げました。私たちは、七十歳になるおじいさんも一緒にいたので、多野岳を越えて、山の中で一泊してから、久志村(現在名護市)の三原におりたんです。

山の中で、二人の日本兵の死体に出会いました。また、三原から汀間(同村)にイモ買いに出掛けたとき、竹槍を持った防衛隊の死体も見ました。汀間の部落民は、イモを売ってくれないんですよ。私たちは五名でしたけれど、どこの家に行っても売らないもん

けど、私たちが歩いて行くと、可笑しく思ったのか、何もしないでみんなかがんでじろじろ下から私を眺めていました。無事に通過して、翌日は大川に一泊してから、朝から歩いて宜野座(現在)のドウ村(宇宜野座のことを同宇という)に行っただけです。私たちは九名で、年寄りと女子供だけでした。捕虜になるつもりもなく、ただ歩いて行って、米軍のいるの中を通過して、いつの間にか捕虜収容所に入っていたわけでした。

宜野座では、集団で畑からイモやキビを取ってきて、暮らしていました。食べものが少なくなって、金武(金武村宇金武、すなわち金武のドウ村)に行きたいと思っていたんですけど、金武までは行けなくて、近くの漢那(旧金武村)に行っただけで、そこで何か月も、長い間いました。

漢那からは、どこにも行けなかつたんですよ。中川(金武村)あたりに、米軍のキャンプができていて、それから先には通れませんでした。金武や石川(旧美里村)は、食糧事情がとていいという噂を聞いていたんですけど、漢那では、一人一週間分として米二合しか配給がありませんでした。私たちは、私とおじいさんと子供の分の配給でしたけど、それだけではとても足りないんですよ。私

は毎日イモ掘り作業に出掛けていました。

惣慶(旧金武村)に五名でイモ掘りに行っただけで、私だけが危険な目に逢ったことがありました。私たちがイモ掘りを畑の中でしているときでした。突然ジープに乗ったアメリカ兵が来たんですよ。そして、私の隣にいるおばあさんが、ジープに向かって歩きながら、手を出して、煙草ぐわうたびみそうり(煙草を恵んで下さい)